

【平和学習について考える】

佐世保市立広田小 長谷川

○ 佐世保空襲について

- ・ S20. 3. 9 と 3.13 アメリカの偵察機が飛来
- ・ S20. 4. 8 B29 一機が来週 爆弾投下により百数十名の死傷者
- ・ S20. 5.24 B29 の来襲

県内では大村の航空廠が何度も空襲を受けていたが、「次は佐世保」と市民の不安は募った。

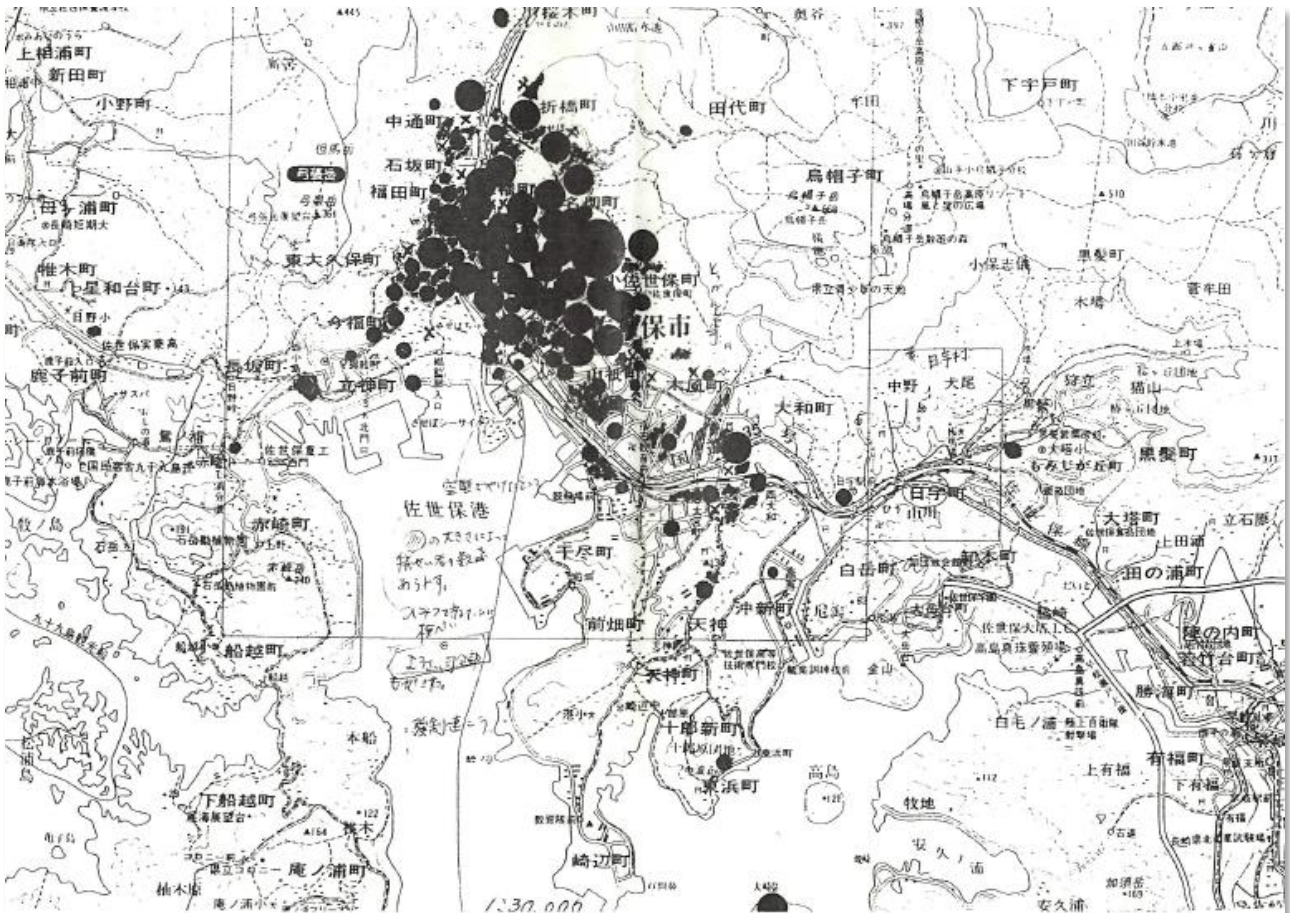
・ S20. 6. 28 夜

- ・ 梅雨の雨雲が空を覆い、「こんな日は大丈夫だろう」と多くの市民が思い込み、眠りについたら夜 11 時 50 分過ぎ、141 機の B29 が襲来し、大量の焼夷弾（わずか 2 時間で千トン）を投下。佐世保は火の海となった。
- ・ 被害の様子
全焼家屋 12037戸 } 全戸数に対する割合 35%
半焼家屋 69戸
罹災者 60734人 全人口に対する割合 27%
- ・ 家、家族、仕事を失った多くの市民は、親類・知人を頼って市内外へ避難した。行くところのない市民は、焼け残った民家や集会所、さらには防空壕にまで住んで雨露をしのいだそうだ。

○ 関係資料について

- ・ R4 年度一人権・平和－佐世保空襲 のフォルダのなかに、参考資料（PDF）を入れています（平成 14 年 6 月 28 日 緒方 悟さん 作成）

例 1：佐世保空襲の犠牲者の分布



例 2 : 佐世保空襲の説明

②

「次は佐世保」と市民の不安は募るばかりであったが、口に出して言うことはできなかった。「今日か、明日か」と連日鳴り渡る空襲警報のサイレンと防空訓練に、市民は身も心も疲れていった。

六月二十八日夜、梅雨の雨雲が空を覆い、「こんな日は大丈夫だろう」と多くの市民は思いこみ眠りについた。十一時五十分すぎ、一四一機（米軍資料）のB29が襲来し、大量の焼夷弾を投下した。「火の雨」が降った。わずか二時間で千トン余の焼夷弾が降り、市の中心部は火の海となり、多くの市民が、苦しみ、もがき、市街や防空壕の中で死んでいった。防火訓練も天井板外しも役に立たなかった。空襲の被害状況は上記の通りである。

当日の犠牲者数については、遺族会の調べで軍人、軍属を除いて、一九八人が、一連の空襲を含めると一、二七人が亡くなれたことが判明している。犠牲者については、現在も遺族会で調査が続けられている。

家、家族、仕事を失った多くの市民は、親類、知人を頼って市内外へ避難した。行く所のない市民は、焼け残った民家や集会所、さらには防空壕にまで住んで雨露をしのいだ。

①

昭和十六年十二月に始まった太平洋戦争は、初めこそ日本に有利だったが、アメリカの戦争体制が整って来ると共に形勢は逆転した。日本は各地で敗退を続けた。

昭和十九年八月九月、アメリカ軍はテニアン、サイパンを占領し大型飛行場を作った。連日ここから何百機ものB29が日本への爆撃をくり返した。空母からの艦載機も日本各地に攻撃を加えた。

昭和十九年十月大村、十一月東京と、B29による空襲を受けた。昭和二十年は、一月三日大阪、名古屋に始まり、終戦までの間に一二〇回余りの空襲が行われた。日本の主要都市は大きな被害を受けた。

主要航路や港ではB29がばらまいた機雷に触れて、多くの船が沈没し、海上交通は輸送力が大きく低下した。

佐世保では三月九日、十三日にアメリカの偵察機が飛来し、四月八日にはB29一機が来襲して爆弾を投下、海軍工廠や民家で百数十名の死傷者を出した。五月二十四日にも来襲したが、市民には詳しいことは知らされなかった。

都市や軍事施設への空襲は続き、県内では大村の航空廠が何回も爆撃を受けた。九州の主要都市も空襲を受け、

④

す婦女子等もいたが大きな混乱もなく平常に戻った。強制的な徴用令、動員令で、市内外の軍需工場や軍の施設に五万人ともいわれる人々、中学校や女学校の生徒が集められていた。海軍鎮守府の下には多数の兵士もいた。これらの人達に、敗戦は平和と自由をもたらした。徴用や動員は解除され、人々は先を争うようにして家族の待つ故郷の家へ、田畑へ、学校へと帰って行った。

海軍は解体され、兵士は故郷へ帰り、軍の諸施設は極端に人員が減った。佐世保、相瀬、針尾の海兵団や少年兵の訓練施設も人影がなくなってしまった。

毎日のように市からの人口の流出はつづいた。食糧難や住宅難も大きな原因であった。空襲前までは三〇万人ともいわれた市の人口は、昭和二十年末には一四万人余と半分に減ってしまったのである。

佐世保の産業、経済、生活を支えた「海軍」という大きな柱を失ったことにより、市民は一時的に心の中に大きな穴があった状況になった。しかし一方で「これではいけない」と自覚し、復興に向けて歩み出そうとする力強い動きも出てきた。

③

昭和二十年は空襲で明けた。人々の生活は最低限の衣食住さえ下回る状況で、一日一日をやつと生きていた。

政府が「本土決戦」を唱える中、空襲はますます激化した。女性や子供まで駆り立てて一億玉砕が叫ばれた。七月、連合国は日本に無条件降伏を要求したが政府はそれを無視した。八月六日広島に、九日長崎に原子爆弾が投下され、数十万の人々が一瞬にして生命をなくした。八日にはソ連が日本に宣戦した。

八月十四日、日本はボツダム宣言を受け入れ、連合国に無条件降伏することを決定、翌日国民に知らせた。

「戦争が終わった！」市民は呆然とするのみであったが、家外冷静に受け止め、ホツとした一面もあった。

不安な点は「鬼畜米英」と教え込まれていた連合国の占領であった。また、市内外の炭鉱、工場、鉄道建設で強制的に労働させられていた朝鮮半島出身者、中国人、捕虜となった連合国軍の兵士たちの動きであった。

敗戦と共に立場は逆転したのである。強制連行、強制労働、差別、虐待、それは受けた者にしか分らない心と体の深い傷となり、いつまでも残りつづけた。

さまざまな噂やデマは人々を怯えさせ、市外へ逃げ出す

例 3 : 被害の実相

